

今日の旧約には、預言者のサムエルが、ベツレヘムに住むエッサイという人の家を訪ねた時の話が出てきます。サムエルが最初にイスラエルの王に選んだサウルは、神様の言うことを聞かないで、自分の考えで行動するようになりました。そこで、神様は、「サウルにかわって、イスラエルの王になるものを、ベツレヘムのエッサイの息子たちの中に見出した。」と言われるのです。サムエルが、エッサイの家を訪ねると、息子が7人いたのですが、だれも、神様の目にかなわず、その時、羊の番をして外に出て行っていた、末の子ダビデが選ばれて、サムエルから油を注がれる、というエピソードです。

この物語で一番大切だと思うのは、最初サムエルが、自分の目に留まったエリアブこそ、油注がれる人だと思った時に、神様が言われた、7節の言葉ではないか、と思います。

『しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。』』

預言者サムエルに限らず、現代の私たちも、それぞれ自分の成長の過程で、肉体の目を通して、いろいろな価値観を植えつけられて、外見で人を判断することが多いものです。特に、自分の経歴に、誇り、プライドがある人は、自分の尺度で物事を見てしまい、神様のみこころがどこにあるのか、それに気がつかないものだ、ということなんだろうと思います。

ところが、神様は、私たちのような見方ではなく、心によって見る、とおっしゃるのです。そして、それは、しばしば、私たちの目から見たなら、立派ではない、どちらかと言うと、見劣りがして、欠点に思うようなところに、神様は注目して、その人を用いられる、ということじゃないか、と私には思えるのです。

以前、クリスチャンではないのですが、なぜか「ウリムとトンミムとはどんなものなのか？」と問われたり「ハリーポッターと賢者の石の、あの石とはどんなものか？」と問われたことがありました。どちらも映画では見たのですが、特に賢者の石の方は、改めて調べると、錬金術と関係がありそうなのですが、それよりも、「ウリムとトンミム」というのに、私は印象が強かったのです。

今日の旧約に出てくるサムエルやダビデの登場する「キング・ダビデ」という映画では、預言者のサムエルが、そのウリムとトンミムを自分の懐から取り出して、エッサイの息子たちの中から、神様の選ばれる新しい王様を判断するのに、この石を掲げるのですが、ダビデが前に出て来た時だけは、その石が輝きだすのです。質問した人には、その映画を渡して見てもらいました。神様の選びに使うんですね。

さて先週の福音書は、イエス様が、ユダヤ人の嫌う、サマリアの町を通り、そこで人々から軽蔑されていた女性に声をかけられた話でした。人々との交わりを避けて、暑い真昼間に、水を汲みに来た女性が、イエス様との出会いによって、自分を嫌っている人々の前に出て、自分に起こったことを人々に証するものに変えられたことを、劇的に描いているお話でした。

今日の福音書もそれと似ています。

イエス様は、生まれつき目の見えない人と出会いますが、その人の目を癒した後、この人のところに、イエス様の敵であるファリサイ派の人々が事情を調べに来ます。そして、今日の所では省略されていますが、癒したのが安息日だったことなどで、この目が見えるようになった人に言いがかりをつけたりします。ところが、この人は、ファリサイ派の追及に対して、堂々と証言をおこない、イエス様が預言者であり、神様から遣わされた方であることを証しするのです。

サマリアの女の人には、以前5人の夫がありましたが、現在は別の男と正式な結婚をせず、同棲中です。人々との交わりを避けたい彼女の行動が、昼間の、のどの渇いたイエス様との出会いに導かれます。生れつき目の見えない人も、その目の見えないことから、イエス様との関わりができます。最初、弟子たちはイエス様に「ラビ、この人が生れつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」と問います。欠点が発生した、その根拠をさぐり、だれの責任か、はっきりさせようとするのです。

ところが、イエス様は、全く別のことを言われました。

「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ日のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。わたしは、世にいる間、世の光である。」

ここでイエス様は、「原因とか責任とかを追及したってしかたがない。闇の中を歩んでいる人を、私の光で照らしてやらなければならない。それが私たちの仕事じゃないか。」とされているのです。

どうでしょうか？皆さん。私たちに何か身体的に、あるいは精神的に、あるいは社会的に、悪い状況が発生した時、私たちは、そうなったことの原因を考えてしまうでしょう。「あの時こうすればよかったのに、」と後悔することも多いのではないのでしょうか。しかし後悔したところで、時間が元に戻るわけではありません。そのことばかり考えていても、明るい明日はやってきません。自分に与えられた状況をどのように克服してゆくか。それに対してイエス様はご自分が働きかけて、その人を立ち上がらせようとしておられるのです。

今日の説教題を「苦しみの意味」としましたが、私たちがそれぞれに味わっている苦しみは、そこに神様が働いてくださることへの期待、あるいは希望みたいな象徴ではないか。原因を考えて後悔することではなく、それを癒してくださる救い主を待ち望む、しるしというふうを考えることはできないでしょうか。

パウロは、ローマの信徒への手紙の8章18節以下で、次のように言っています。

『将来の栄光

18:現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないと思われています。19:被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。』

今の状況になった、過去に目を向けるのではなく、私とともに歩み、明日に向かって道を示してくださる神様に、信頼を置いて歩むように、という促しがある。その力が与えられるのを待って、少しずつ自分で歩み始めることを願っておられるのです。

現実的な話をしますと、

教区は、長崎のビルの収入が入らなくなって、もう何年も過ぎています。その原因は明らかですが、今後どうすることがいいのか、全く先の見通しがたっていません。

また私たちの国も、失われた30年以上の経済の停滞が深刻です。こちらも原因は明らかなのに、これからどうして行こう、という話が全く出てきません。原因となったことに責任を追及するわけでもなければ、それを認めるわけでもない。そして困っている人に対して、「それではこうしたらどうか」と提案をする気力さえなくなっているのではないか。

今日の福音書の奇跡物語は、私たちに、「自分の弱さに働きかけてくださる神様の恵みに気付きなさい。あなたの苦しみを通して、そこに神様の恵みが与えられますよ。」と言っているように思います。

その神様の恵みは、わたしたちを、サマリアの女や、生れつきの盲人のように、私たちを堂々と立ち上がらせ、証しするものに変えてくださる、と思うのです。

それに信頼して、新しいことに踏み出すことが大切なのだらうと思います。